立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１８年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　ドイツ文学　専攻		
研究代表者（2019年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名	
	☐博士前期課程　年 ☑博士後期課程２　年・17PI002J	保科　泰　印	
指導教員	所属・職名	氏　名	
	文学部教授	副島博彦　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	ラズロー・モホイ＝ナジの写真論・芸術論を中心とした「新たな視点」に関する言説分析		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名	
	文学研究科ドイツ文学専攻博士課程後期課程２年	保科　泰	
研究期間	２０１８　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）　179,996円　／（採択金額）　200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の主題は1920年代における写真・映画等のメディア革命によって生じた「新しい視覚」（Neues Sehen）の問題を，ハンガリー出身の芸術家でありバウハウスでも教鞭を務めたラズロー・モホイ＝ナジ（László Moholy-Nagy, 1895-1946）の写真論を中心に言説分析することである。モホイ＝ナジは新たな写真表象方法を提示するにあたり，①カメラを用いず光を可視化する手法であるフォトグラム，②仰角や俯瞰などの「新たな視点」からの撮影，③写真を切り取り貼り付け一つの作品をつくりあげるための手法であるフォトプラスティックと主に３つの手法を示す。今年度の研究においては②にあたる俯瞰・仰角・斜角などの「新たな視点」に関する彼の言説を分析の対象に据え，この「新たな視点」と西洋における伝統的な表象形式である遠近法との連関を考察した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　モホイ＝ナジ　〕〔　ライカの小型カメラ　〕〔　新しい視点　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本年度はラズロー・モホイ＝ナジの主著『絵画・写真・映画』（*„Malerei Fotografie Film“*,1927）を中心としたテクスト分析からとりわけ彼が提唱した仰角，俯瞰そして斜角などの「新しい視点」（die neuen Sichten）に関する彼の思想を明確にするとともに，このような「新たな視点」に焦点が当てられるようになった背景を 1925 年発売のライカの小型カメラがもたらしたメディア技術の変革を中心に考察することを目指した。以下，本年度の研究内容の報告を行う。

①『絵画・写真・映画』の各版比較

モホイ＝ナジの主著『絵画・写真・映画』は彼が 1923 年より教鞭をとることになるドイツの芸術学校バウハウスの叢書の第 8 巻目として 1925 年に初版が出版される。そしてその 2 年後の 1927 年に第 2 版が出版され，この版は現在日本語訳，英語訳の底本となっている。章立て等には大幅な変更点は見られないが，掲載されている写真には大きな変化が見受けられる。
その代表的な変化として挙げられるのが，モホイ＝ナジ本人が写真機器を用いて撮影した写真作品が第 2 版より掲載されるようになった点である。モホイ＝ナジは 1920 年代初頭より写真媒体を用いた作品を制作し始めるが，その多くが光そのものを陰影によって可視化するものや，対象物を感光性のある印画紙に置き，それに光を当てることでその物質の痕跡が紙に定着するようなものであり，これら写真機器を用いない手法をモホイ＝ナジは「フォトグラム」（Fotogramm）と名付けた。このような手法は写真術が発明された 19 世紀中ごろヘンリー・フォックス・タルボット（William Henry Fox Talbot, 1800_ 1877）等が既に行っていたが，1910 年代後半から 20 年代前半にかけて再び写真史のなかに登場することとなる。その代表的なものとしてはクリスチャン・シャド（Christian Schad, 1894_ 1982）の「シャドグラフ」, マン・レイ（Man Ray,1890_ 1976）の「レイヨグラフ」等が挙げられ，このような造形活動はモホイ＝ナジの「フォトグラム」と通底関係にあり，その通底性を支えるのは写真メディアの特性を生かした造形を行うという思想であった。初版において掲載されたモホイ＝ナジの作品のほとんどが「フォトグラム」であったのは，このような歴史的背景の影響であることが考察できる。そして 1920 年代後半からモホイ＝ナジの写真作品に大きな変化が見られるようになる。それが，「フォトグラム」とは異なる写真機器を用い撮影された作品群である。この変化が示している通り，モホイ＝ナジは 1920 年代後半よりカメラを携え様々な被写体を写真に残すのだが，その撮影方法のメディア技術的前提となったのが 1925 年に発売されたライカの小型カメラであった。1925 年にモホイ＝ナジとともにパリに旅行した建築史家のジークフリード・ギーディオン（Sigfried Giedion, 1888_ 1964）は，モホイ＝ナジが購入したばかりのライカの小型カメラを上下左右に動かしながら，様々な角度からパリの街並みを写真に収めていたことを証言している。そしてこの旅行において撮られた写真が『絵画・写真・映画』の第 2 版において掲載されることになるのである。

②ライカの小型カメラおよび同時代的な写真家の言説

ライカの小型カメラは従来の写真史の言説において，フォトジャーナリズムの隆盛との連関で言及されることがその大半であった。例えばジゼル・フロイント（Gisèle Freund, 1908_ 2000）は『写真と社会　メディアのポリティーク』（1980）において，カメラの小型化に伴い，被写体に気付かれることない撮影が可能となる技術が雑誌や新聞に大々的に載せられる決定的一瞬を捉えた写真の前提条件であったことを指摘している。フォトジャーナリズムはドイツ語圏において 1910 年後半から 1920 年代にかけて写真雑誌や新聞等を中心に発展した，図像と文字による表現方法であり，ライカの小型カメラの誕生が，この新たなジャーナリズムの発展に寄与したことは確かなことであろう。しかし，本研究においては，フォトジャーナリズムと同時代的にドイツ語圏を中心に起こった写真による新たな表現方法である俯瞰･仰角･斜角からの撮影の前提条件として小型カメラ存在があったことを指摘することが主題となる。モホイ＝ナジはこれらの視点を「新たな視点」（die neuen Sichten）と名付けた。この「新たな視点」に関する従来の研究は，これらの視点からの撮影の被写体として多く登場する鉄骨の塔との連関から，都市の工業化，およびそれに伴う知覚の変動との通底性を考察したものや（Molderings,2008）この複数形の「新たな視点」を俯瞰に限定し，そのモチーフの系譜を絵画史から探るもの（Kemp,2006）などが挙げられ，ライカの小型カメラがもたらした撮影方法の変化と「新たな視点」での撮影との連関は考察の対象とはならなかった。

研究成果の概要　つづき

しかし，①で言及したように，モホイ＝ナジはライカの小型カメラを手に取ったことで自身の写真表象を大きく転換させ，『絵画・写真・映画』ではカメラを動かして様々な視点から撮影を行うことを提唱する。このような言説は同時代的な写真家の写真論においても見受けられるものである。例えばモホイ＝ナジと同時代に活躍した写真家のヴェルナー・グレフ（Werner Gräff,1901_ 1978）は『新しい写真家登場！』（*Es kommt der neue Fotograf!*, 1929）において，従来の写真表象で支配的であった中心遠近法的な視点に否定的な態度を示すとともに，カメラを上下左右に動かし，様々な視点から撮影するよう記述するのである。

③新たなカメラ・オブスキュラでの撮影

モホイ＝ナジは，ライカの小型カメラの購入を境に新たな写真表象の段階へと進むことになるのだが，その変換点は彼のテクストからも確認できる。本研究において主な分析の対象としたのはカメラ・オブスキュラという古典的な光学装置に関する彼の言説である。ジョナサン・クレーリー（Jonathan Crary,1951 生）は『観察者の系譜』(1992）において，カメラ・オブスキュラなどの視覚装置に関する言説をもとに，古典的な視覚モデルの断絶が 19 世紀初頭に生じる様を描いて見せた。つまりクレーリーは，デカルト（René Descartes, 1596_ 1650）の『屈折光学』(1637）などを例に挙げ，17，18 世紀において人間の視覚が，外界から分断された状態で対象を眺める観察者を生み出すカメラ・オブスキュラの仕組みと類似したものとして捉えられていたことを，そしてそこでは人間の視覚に内在する不確実性が捨象されていたことを示し，一方で 19 世紀にはこのような枠組みが崩壊し，視覚の不確実性が生理学と密接なつながり持つことを指摘したのである。クレーリーの見解に従えば，カメラ・オブスキュラは近代以前の視覚モデルと密接に結びつく古典的な光学装置としてその役割を果たしていたことが推測できる。この古典的な光学装置に対し，ピクトリアリズムなどの絵画的な写真術を批判したモホイ＝ナジは『絵画・写真・映画』において様々な言説を残している。彼は，まず写真メディアは伝統的な遠近法的な表象の枠組みから抜け出すべきであると主張する。ここでは，カメラ・オブスキュラは遠近法的な諸規定（die perspektivischen Gesetze）に組み込まれている装置として記述される。そしてモホイ＝ナジはカメラ・オブスキュラを新たな光学装置として捉えることを提唱する。この意味におけるカメラ・オブスキュラとは，対象物を遠近法的に再現表象するための装置ではなく，人間の視覚とは異なる，対象物をフラットにつかみ取るようなレンズが備わった装置としての，新たなカメラ・オブスキュラである。そして，モホイ＝ナジは従来人間の視覚を規定していたこの暗室を今度は人間が使用（Benutzung）する側に立つべきと記述する。つまり従来，対象物の再現表象のための装置として人間の視覚モデルを規定していたこの装置が，モホイ＝ナジの記述においては人間によって「使用」される光学装置へとその関係が転倒しているのである。そして，この新たなカメラ・オブスキュラで撮影されるべき写真として彼が提示するのが俯瞰・仰角・斜角などの「新たな視点」の写真群である。この「新たな視点」の写真においてモホイ＝ナジはその新しさを表す語句として，「体験」（Erlebnis）ということばを添える。これらの記述からはモホイ＝ナジがこれらの写真の撮影における従来の経験（Erfahrung）とは異なる，身体性を伴なった「体験」の重要性を主張していることが考察できる。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①保科泰　『新たなカメラ・オブスキュラ体験　ラズロー・モホイ＝ナジの『絵画・写真・映画』をめぐって』,Wort,立教大学ドイツ文学研究室，40 号，23-35 頁。

②なし

③なし

④保科泰　『新たな視覚の表現者―ラズロー・モホイ＝ナジの芸術論・写真論を中心に―』日本ヘルダー学会，5 月 12～13 日，立教大学